

試行錯誤の末に辿り着いた新技術。
逆境から掴んだ田川初の農林水産大臣賞。
崇高な探究心が産んだ「日本の大豆」に迫ります。

為せば「成」る。



① 妻の照代さんと出席した都内での表彰式で、吉川貴盛農林水産大臣から賞状を受け取る山口さん。② 平成30年に収穫した大豆は上位等級が前年より1割増しの約8割と、前年を上回る良質な栽培を実現。③ 農林水産省福岡支局長ら9名が視察に来訪。④ 山口さんが所属する伊方地区営農組合の⑤から松井清司さん・山口さん・池永明さん・田丸久美雄さん・桑野政昭さん。

④ 部分浅耕一工程播種 Close up! Agriculture
トラクターに長い爪と短い爪を交互に装着して、種をまく(播種)部分のみを浅く耕す方法。栽培に重要な水分調節がしやすいため乾燥や多湿に強く、耕作と播種を同時に行えるため、作業時間や燃料費の削減にも効果がある。

この町から
日本一の農産物で!!

Fukuchi's power & color
フクチカラ人
山口 忠秋 さん

福智町伊方出身。67歳。名城大学農学部卒業後、旧方城町役場に入庁。合併後は産業振興(現農政)課長などを務め、退職後、本格的に農業に従事。平成29年に設立されたJAたがわ「麦・大豆部会」の初代部会長に就任。現町農業委員会会長。

ふくちの大地が育んだ
農林水産大臣賞の「大豆」

「農業は、好きやねえ」と、頬を緩ませる山口忠秋さん。福智町伊方地区を拠点に、大豆・麦・米を栽培しています。耕作する田畑の面積は8・7ヘクタールで、なんと福岡ドーム約1個分に相当。その半数の4・6ヘクタールで、タンパク質が豊富でバランスのとれた味わいが特徴の「フクユタカ」という品種の大豆を栽培しています。山口さんが育てるこの大豆。これこそが、第47回全国豆類経営改善共励会の個人最優秀賞にあたる「大豆家族経営の部」で農林水産大臣賞を受賞した日本一の大豆なのです。

この全国審査会では、各県から推薦された64の大豆農家を対象に収量や品質、作業の省力化などを審査。山口さんは、平成30年度から導入した新技術「部分浅耕一工程播種」という栽培法により、千㎡当たりの単位収量が県平均の156%を1・5倍上回る241%と、著しく高い収量を実現。また全国の平均作業時間6・9時間を4・7時間も短縮し、人件費や燃料費の削減に成功したことも高く評価され、今回の受賞に至りました。

「できない」ではなく、
「できる理由」を探したい。

かつて炭鉱で栄えていた福智町は、鉱害復旧田が多く排水性の悪さが課題でした。また田畑一つひとつの面積が小さく、分散していることで作業効率も悪く、田川地区の大豆は県内でも低水準の品物でした。そんな状況に、山口さんは「どうにかして県内に負けない農作物を作りたい。環境に合う栽培法はないか」と、新しい技術や機材の試行錯誤を重ねました。思うような成果を得られな

い中、研修先で新技術「部分浅耕一工程播種」と出会います。大豆栽培の要である水分調整や作業時間の削減に効果のある技術です。しかし、その当時ではまだ活用実績が少なかつた部分浅耕。新技術の導入を不安視する声もありましたが、山口さんは「できんじゃなくて、挑戦せんと何も良くならん」と、平成30年より田川普及指導センターの川村富輝さんに

助言を受けながら部分浅耕による大豆栽培を開始。大豆の大敵である干ばつの年にも関わらず、順調な生育をみせたこの年、例年の半分以下の作業時間で過去最高の収量を記録。高い探究心で農業に向き合い続けたその努力が実を結んだ瞬間でした。

「福智の農」を守りたい。
未来への挑戦が、今始まる。



弁天米みそ

地産地消を目指し、JAたがわの女性部が作る「弁天米みそ」。山口会長ら伊方地区営農組合が栽培する大豆や福智産のお米など、地元素材をふんだんに使用したこのみそは、8月上旬から「ふくちの郷(弁天)」(092-7474)で販売予定。

農業従事者の高齢化や若者の農業離れ。その課題を解決するには、若者が安心して農業ができる土壌を作ること。すなわち法人を設立し、地域全体の田畑を一括で管理することが重要だと山口さんは言います。しかし、この計画はまだ駆け出し段階。法人設立への道のりには時間を要しますが、山口さんは「今日も農業とその未来へ向き合い続けます。「福智の農」を守るために。」